

「全然菌が立たないです、このままじゃ——！」  
 シンたちが結束する傍らで、セルティは絶望の淵ふちに立たされていた。

護衛に雇っているギルドの応援が遅い。

この三種族から選出した自警団程度では、中型のドラゴンすら撃退できない。

ドラゴンを攪乱するため空を飛んだ鳥獣種ハイベイは次々と落とされ、弓矢を射かける半森精種ハーフエルフたちは、雪に埋まって吐きかけられた炎を消している。

被害総額も著しい。

ならば借金を覚悟で、セルティが精霊としての力を——他者にスキルを与える《誓約ブレイジュ》を使うより他はない。

（また、これを使わなくてはならないのですか……。私が大嫌いな、忌まわしきスキルの力を）

本来、高位種族の精霊であるセルティは、こんな辺境の最下層にいる存在ではない。

ここまで落ちてきたのは、とある訳があった。

（だけど、他にドラゴンを倒す手段がありません。シンさんたちも、やられてしまいます）  
 セルティは苦渋の表情で決断する。

自らの腕の刻印ウォレットに手を添え、覚悟を決めようとした、その刹那。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

大音響の咆哮が、蒼天を突き抜ける。

セルティとレストを狙い定めたドラゴンが、両翼を唸らせて急降下した。

「ッ……!？」

セルティが息を呑み、表情を凍り付かせる。

それでも半森精種のレストを庇おうと前に立ったとき、遠くで小さな声が聞こえた。

「——迷わず仲間の盾として立つか、やるな」

直後。ドラゴンの眼球に、矢のような速度で投げられたスコップが突き立てられる。

セルティが驚きに目を見開いたそのとき、無数の矢を射かけられても平然としていた巨軀の竜が、初めて苦悶の鳴き声を漏らした。

「ギ、グオオオオオオオオアアアアッ！」

「シン様っ!？」

二人を救ったそのスコップは遙か遠くに立つシンの腕から放たれていた。

その異常な光景に同じく、他の三種族たちも瞠目する。

「こ、攻撃が通った、のか!? たかが人間の力で……!？」

「目に当てたんだ! いやそれより、スキルも使わず投げたのか!？」

遠距離から正確にスコップを命中させたこともそうだが、その投擲速度が異常だ。

啞然とする彼らに向け、シンは平然と言い放った。

「下がれ！ 悪いがお前たちは攻略の仕方を間違えている。鳥獣種<sup>ハイビイ</sup>たち風のスキルを使つたところで、その程度ではドラゴンの動きは封じられんし、ならば矢を射かける半森精種<sup>ハイフエルフ</sup>たちの邪魔にしかならん。そして土精種<sup>ドラフ</sup>たちよ。お前たちはドラゴンの白兵戦に備えるより先に、半森精種<sup>ハイフエルフ</sup>たちが入れる雪壕<sup>せつこう</sup>を掘れ、それに隠れば炎はかわせる」

「あ、う……」

いきなりここへ飛ばされてきた異世界の人間。

それも名のある種族ではなく、『雑種<sup>ヒズラフワット</sup>』と呼ばれる知も力も持たないはずの弱者。

そのはずである人間の指示など、本来は受け入れるはずはない。

にもかかわらず、確信を込めたシンの声は従わざるをえない空気を持っていた。

「……な、なに勝手に指示を出してるんですか!? いいからシン様は隠れて——」

近くにやってきたシンに対し、セルティは顔を真っ赤<sup>か</sup>にしてあたふたする。

そのセルティの手を取り、シンはぐいと自分の方へ寄せて、告げた。

「精霊種のリーダー、セルティよ。仲間を救うために身を挺<sup>てい</sup>したお前の覚悟、見事だった」

まずはそう賛美の声を出し、微かな笑みを口元に見せる。

「だが、俺たち人間側のリーダーとして言わせてもらおう。お前のやり方では理想を為しえない。故にここは俺が代わろう。現代の三強と呼ばれた俺が、この世界で仕事をしてやろう」

「なっ、何を言ってるんですかシン様は、そもそも——」

「いいか、俺は代行役であり、交渉人であり——そして指導者だ。もとより領主とは、人の上に立つ支配階級の人間とはそうしたものだ。それに相応しい行動を為すべく、俺は御曹司おんざうしとして幼少より生きてきた」

だから——、と。

それを示すようにシンは両袖をまくり、苦しみのたうつドラゴンの前に立ちはだかる。

「お前の覚悟は見せてもらった。今から——俺たちの力を見せてやる」

「——ゲオオオオオオオオオオンッ！」

シンがそう言い放った直後、地面に伏せていたドラゴンが飛翔ひしょうする。

拳大の砲丸を時速百五十キロで投擲できるシンの腕力と、ダーツの名手すら完敗させる精緻な技術の成せる絶技。

先ほど投擲したスコップの一撃は、超級のモンスターであるドラゴンの防御力を越えていたが——大地に激突し、雪の上を滑ったドラゴンは、早くも体勢を立て直す。

その腫れた左目の眼光には、憤怒と殺意が塗り込められていた。

「ふむ。皮膚だけでなく、眼球の高度も鋼並か。地球にはいないバケモノのようだが、やれるか？ 冥夢」

「自信はないですが……やってみる、です」

小屋の陰にいる冥夢が、両手をパーカーのポケットから出し、応える。

ドラゴンが気を取られたその刹那、冥夢の姿が雪上から消えた。

「えっ……!?!」

セルティとレストが目丸くした直後、小さな音がいくつも弾ける。

雪を蹴り、小屋の壁を蹴り、背の高い針葉樹を蹴って宙を舞う。

そのやる気のない普段の仕草からは考えられないほど鮮やかな身のこなしで、ドラゴンを攪乱した。

「どういう動きですかあれは!?! スキルもまだ継承していないはずなのに——」

「中国雑伎団やサーカスも真っ青だが、ヤツの全力はあんなものではない。俺の屋敷に侵入して一戦交えたときは、壁や天井まで歩いてのけた」

「グオオオオオンッ!」

冥夢の動きを警戒し、ドラゴンが頭上を旋回するように飛ぶ。

的を絞らせず、遮蔽物のない空ならば追って来られないと判断したのだろうか、その動物としての知恵は、あっさりと人の技術に覆くつがえされた。

「——みんなが空にいてくれてよかった、です」

「嘘おおおっ!?!」

跳躍した冥夢に足をつかまれた中空のピリカが、頓狂な声を上げる。

空中でドラゴンを包囲していた鳥獣種<sup>ハービィ</sup>たちの足をつかみ、肩や背中を蹴って飛び、十メートル以上の高度にまで上り詰めていた。

が、対するドラゴンも、強敵の象徴である名に恥じぬ力を見せる。

ピリカの足に捕まった冥夢に素早く顔を向け、口から業火を吐くべく息を吸った。

「——ゲオオオオオオオオオオオオオンッ！」

突如轟いた咆哮に、一同の視線が一点に集まる。

新たなドラゴンの襲来かと身を竦<sup>すく</sup>ませるが、その声の主は——帝ノ凜紅だった。

「私にモンスター役なんてやらせたからには、しつかり勝ちなさいよね？」

芸能のあらゆるジャンルを極めた凜紅は、その異常とも呼べる絶対音感と声帯により、あらゆる音を再現できる。

その同族の警戒した声を聞き、ドラゴンは不意を突かれて動きを止める。

——刹那、冥夢の両腕が尋常ならざる高速で動き、その翼を狙い撃った。

「素手で!? いくら何でも無理ですよ! 剣や鏃<sup>やじり</sup>すら通らないのに!」

まさかの攻撃方法に、背後のセルティが思わず叫ぶ。

「グ、ギアアアアッ!」

が、直後ドラゴンは翼の動きを失い、真っ直ぐに大地へと落下した。

「——って、どうして!」

「どれほど硬い生き物であろうとも、飛ぶために翼の部分は肉が薄い。例のスキルとやらが使えれば別だが、モンスターにそれはないのだろうか？ やつらには刻印ウオレットが見当たらないからな」

「そ、それは——そうです、けど。何で」

シンの洞察力に、セルティは啞然とするしかない。

霊貨アウラを用いた奇跡を行使できないモンスターの弱点をこの短時間で見抜き、すぐさま指示を出したというのか。

「言われた通り仕事はしました。あとは任せました、です……」

「ちよわーっ！ 待つて待つて！ 危ないっば！」

真つ逆さまに落下する冥夢を、ピリカが慌ててキャッチする。

雪上へ叩たたきつけられたドラゴンに、しばらく三種族は呆然と突っ立っていたが、数秒後

——はっとした土精種ドラフたちが、猛然と襲いかかった。

「今だ野郎ども、やっちまうべ！」

「おお、地面に落ちたならこっちのもんだ！」

「《溜めチャージ》のスキルを使えば、攻撃も通るに違いねえだ！」

「——まだ手を出すな！ 危険だ！」

シンが警戒を促した直後、ドラゴンの大口がガバリと開かれる。

直後、灼熱の炎が渦を巻き、眼前の雑木林が赤に染まった。

「うあちいいいいッ!」

飛びかかった数人の土精種<sup>ドドラフ</sup>たちはピッケルを投げ捨て、たまらず雪の中に潜り込む。飛行を封じてなお、圧倒的な破壊力。

矢を射かけようと様子を窺<sup>うかが</sup>っていた半森精種<sup>ハーフエルフ</sup>たちも、思わず怯<sup>ひる</sup>んで手を止める。が、その絶望的な戦力差を見てなお動じず、シンは凄まじい勢いで駆けていた。

「シン様っ!」

「ゲアアアアアッ!」

シンの突貫にドラゴンは応じるように息を吸い、その大剣のような爪を生やした前足を振り上げ、迎撃の体勢を取る。

「シンが雪に潜って炎を避けたら、その瞬間に自分のツメを振り落とす、ってことね」

「あのドラゴンも、抜け目ない……です」

敵の狙いを見切った凜紅と冥夢が、静かに呟く。

それを聞いたセルティは、本来自分たちよりか弱くスキルも持たない人間たちへ、精霊である自分の立場も忘れ、叫んでいた。

「二人とも見てないで助けてください! このままじゃシン様が——」

「……だいじよぶ、たぶん」

「ええ。なんてことはないわね、あの程度」



が、同じ現代の伝説たる三強の二人は、眉ひとつ動かさず断言する。

「つて、ええええっ!」

困惑したセルティが叫ぶ傍らで、シンはドラゴンの炎に臆さず、突っ込んでいた。瞬時に炎の海へと吞まれてなお、シンの身体は燃えていなかった。

「セルティさん、この空っぽの瓶は——!？」

レストの眩きに反応して振り向くと、セルティはその答えを得る。

以前倒したスライムの残骸であるゼリーの入った瓶が開き、中身がぶちまけられていた。防火性を持つそれを頭から被り、シンは特攻していたのだ。

「ぬかったな化け物。——お前の負けだ」

懐に潜り込んだシンが不敵に微笑む、が。

それを目撃する三種類の自警団たちは、静止の声を上げていた。

「無理だ! いくら近づいたところで、素手でドラゴンを倒すなんて——!」

「ギシャアアアアッ!」

ドラゴンがその言葉に応じるように、大口を開けて襲いかかる。

瞬間、手に何かを握ったシンの右腕が、容赦なくその中に突っ込まれた。

——パシッ! バチバチバチイイッ!

「グエ、ギアアアアアッ!」

閃光と火花が口内で弾け、ドラゴンが絶叫を上げる。

「なっ、スキルはまだ使えないはずなのに、どうして雷を——!?」

レストが感嘆すると同時に、仕留め終えたシンが右腕を引き抜く。

その手の先には、先端から金属の端子が伸びた、小型の機械が握られていた。

「単なる安全装置を解除しただけの暴徒鎮圧用スタンガンだが、見るのは初めてか？ 異世界からの来客が多い割には遅れているな」

どさり、と。ドラゴンが崩れ落ちた直後、シンが不敵に微笑んでそれを見下ろし、眼鏡のブリッジを軽く抑える。

「すまなかつたなドラゴンよ、少々本気を出し過ぎてしまったようだ」

それで、この戦いに決着がついたことを理解した。

「……し、信じられんっべ、ただの雑種が」

「まだスキルも覚えてない連中のはず、だよな？」

「何者なの、あいつら——」

髭面の土精種、半森精種の青年、鳥獣種の少女が呆然と呟く。

この弱肉強食のオーバードガイアにおいて、本来は知能、肉体ともに最底辺で搾取されるはずの人間だった三人が、強力なドラゴンを生身のまま撃破したというその現実には、我も忘れて見入っていた。

直後。パシッと、ドラゴンの死骸から光が瞬いて、五百円玉ほどの大きさをした、無数の青白い貨幣コインが零れ落ちる。

「これが、噂に聞く神々の通貨——アウラ霊貨と呼ばれるものか？」

シンが拾い上げると、手首の刻印ウオレットが光を帯びる。

「あ、そのまま回収を怠れば、アウラ霊貨はシン様の刻印ウオレットに吸収されます。それで——」

つまりはこの刻印ウオレットとは、身体に通じる財布の役目を果たしているらしい。

今まで『6 Aur』と記されていた刻印ウオレットの残高が、『118 Aur』まで増大した。

「そうか。このドラゴンは現代額にして約百万——これだけ大量のアウラ霊貨を持つ強敵だった、ということか？」

「は、はいそうです。ですが倒してアウラ霊貨を落とすのは、モンスターだけですから」

尋ねられたセルティが、慌てて応える。

ふむ、とシンは頷き、自らの顎に手を添えた。

「アウラ霊貨を持つ他の種族たちを殺したところで、容易に奪うことはできない、と？」

「それがこの世界、オーバーボードガイアの絶対神が定めた規律です。種族間の暴力や殺傷は禁じられていますから。お金を介して平和な関係を保つのが、わたしたちのルールです」

「なるほど立派な話だ。俺たちの世界の人間にも是非聞かせてやりたい。ところで——このアウラ霊貨は自ら出すこともできるのか？」

「あ、はい。刻印ウオレットに対して念じれば——って、何してるんですかシン様！」

チャリンと、シンは今手に入れたばかりの百枚の靈貨アムラを刻印ウオレットから取り出すと、袋に詰め、セルティの前へ差し出してみせる。

「今までの滞在費と、これからしばらく世話になる宿代だ。お前がこの集落のリーダーなのだから？ 遠慮なく受けとっておけ」

「ちよっ、いらなそうですってばそんなの。これはわたしが好きでやってることですし、結構な額なんですから、大切に持っていた方が——」

「それはこれからも、俺たち三人を都合のいい客人として扱うということか？ だが俺は、その金で別のものを買うつもりだ。聞け——今この場に集う三種類の者たちよ！」

張り上げたシンの一言に、ざわりと波紋が辺りに広がる。

「いいか、お前たちはまるでなっていない。他の種族と争えず、このような僻地へきちへと追いやり続けられる低次元の奴隷たちだ。故に断言しよう、このままでは平和どころか、己の自由すらも勝ち取れはしないと！」

「なっ……!?!」

機関銃の如くに放たれるシンの言葉に、セルティはわたわたと慌てる。

三種族の間にも動揺の気配が見て取れるが、反論の声は上がらなかつた。

彼らが登場し、そしてこの事件が起きた短時間で察したのだ。

この三人が今までの『はぐれ人』とはまるで別次元の存在であり、道具や知識だけでなく、肉体や知力すら上回る存在だと。

「俺たちはまず客人の立場を捨て、この集落の一員として、対等以上に認められる権利を買いたい。それが先ほど渡した手付け金の百靈貨だ。——異論はないな」

「ありますっ！ 何勝手なこと言ってるんですかシン様は！」

すらすらと演説をするシンに対し、セルティは思い切りワイシャツにつかみかかる。

「ここはわたしが平和な世界を実現するために作った集落です！ そんな勝手なことは許しませんっ！」

顔を真っ赤にしながら、ぼかぼかとシンを叩こうとすると、彼女の衣装から零れそうな大きな胸も、あわせてふるふる揺れている。

（——やはり、でかいな）

真剣な表情でセルティの谷間を覗きつつ、素早く周囲の種族たちの反応を窺った。

体感の雰囲気では、半々というところか。

平和主義者であるセルティの理想に共感しつつも、この辛い境遇の生活に疲れており、機会があれば方針を変えたいという気持ちが見え透けて見えた。

「お金なんて要りませんから！ そういうことなら受けとりませんよ！ って——何真剣な顔でおっぱい見てるんですかこの変態！」

「まあ、落ち着けヘタレ精霊よ。いくら金に支配されたこの世界とはいえ、見られただけで減るものじゃあるまい?」

「何うまいこと言った気ですか?!!」

「あの、話が宙ぶらりんなんですけど……」

レストから困惑した眼差し向けられ、シンはやれやれと嘆息した。

「——では本題に戻ろう。勘違いをされては困るのだが、俺たちは何も金でこの集落を乗っ取るつもりはない」

「……えっ?」

と、セルティが目を丸くしたそのとき、シンは不敵に微笑んだ。

「いいか? 俺は代行役であり、交渉人であり、そして——指導者だ。お前たちにとっての異世界たる現代において、支配階級に君臨し荒稼ぎをしてきた存在だ。枢木冥夢は諜報や破壊工作、そして戦闘。凜紅は芸能と娯楽を極めた分野で、それぞれ比類なき成功を収めてきた。その能力の一端は、既にこの二日間で証明したはずだ」

シンの流暢りゅうちょうかつ断言的なその演説に、セルティは口を挟めない。

偶然起き、自分たちが一番戸惑うはずのモンスターの強襲を、シンは自らの提案を押し通す交渉の機会へと瞬時に置き換えてしまった。

(御曹司とは、なんとというヒトなのですか……!)

ギルドマスターとして、集落の代表に選ばれたセルティだが、自分が政まつりごとに疎とほいことは自覚している。

それでもなお眼前の御剣シンが、支配者として圧倒的な資質を持っていることは、嫌でも伝わってきた。

「だが、この世界においてはまだ知識も、部下も財産もロクに持たない新参者だ。故に——」  
すつと自らの胸に手を当て、残高が僅かとなった右手の刻印ウオレットを眼前に構え、告げる。

「お前たち三種族及びリーダーのセルティに申し出る。我々三名を雇え。この寄り集まりの金稼ぎ役として、まずは百霊貨アウラを対価として俺たちに支払い契約せよ」

セルティは驚きの表情を浮かべつつ、周囲に集まってきた三種族の代表たちを見つめる。  
レスト、ピリカ、ロゼッタの三名は、やがてこくりと頷いた。

「——わかりました。シン様の申し出を受けます。あなたたちは今日から客人ではなく、わたしたちの仲間です！」

オオオオオオオッ……！ と、集まっていた三種族の間に、大きな歓声が広がる。  
が、ふいに凜紅がシンの背後から、その肩に腕を乗せてきた。

「ちよつと、あんた何勝手に人のお金使ってくれちゃってるのよ？ 私まだ、さつき協力した分け前ももらってないんだけど？」

微かに頬を膨らませて愚痴を言う姿も、絶世のアイドルであれば可愛らしかった。

「やれやれ、皆の力を合わせて窮地を乗り越えたばかりだというのに金の話か。お前は純粹な心をどこへ置いてきた？」

「純真な心の持ち主がアイドルをやれると思ってる、あなたの純真まよの方が眩しいわ」  
シンの皮肉にも動じず、凜紅はそれを鼻で笑った。

「何でもいいけど、ポテチとコーラをください、です。ガス欠です……」

最後に眠そうな半目を向けて、くいくいとシンの着るワイシャツの裾を引っ張ってきた。

「少し我慢しろ、物事には順序がある。これより俺たちも作戦会議に入るとしよう」

二人にそう耳打ちし、シンは改めてセルティに向き直る。

「すみません皆さん。積もる話もあるんですが、ちよつと怪我人の治療とかいろいろありますので、今日のところは——」

セルティがおおずと申し出た瞬間、シンは即座に頷いてみせる。

「ああ、今晚は三人ともこの宿で泊まらせてもらおう。我々の待遇については、明日正式に相談させてくれ」

「は、はいっ！ では、夕食を作りますので。怪我の治療が必要なら言ってください」

「俺は平気だ。炎に巻かれた他の連中を気遣ってやれ」

シンは目を合わさず、あくまでも素っ気なく告げる。

そうして背を向けようとしたとき、そつと緑の布が差し出された。



「これは——?」

「半森精種ハーフエルフが集めた薬草入りの当て布です。その、万がどこかが痛んだら使ってください。今日は助けてくれて、本当にありがとうございます」

「ふっ……。相変わらずお節介なヤツだ」

「とかいいつつ頬を染めるのやめなさいよ。男のツンデレなんて気持ち悪いわよ?」

「シンは御曹司のくせに、女の子にちよろいです……」

セルティが去った直後、凜紅と冥夢がやつかみを言ってくる。

「黙れ! これはあれだ! あの女が『パズル&ファンタジー』のセルティアに似ているのが悪いのだ! 断じて情にほだされたとか、おっぱい大きいよねとかそういうわけではない!」

ビシツと言いつき、シンは眼鏡のブリッジを軽く押す。

「ふうん、まあいいけど。それで、今後の算段って何かしら? つまらない話だったら、ここを出て勝手にやらせてもらうわよ? 早くスキルとやらも欲しいしね」

「わたしは、ここでご飯と部屋の用意さえしてもらえば、それでいいです」

上昇志向の強い凜紅と、アンニユイでふしだらな冥夢。

現代で同じ三強と呼ばれていた存在でも、これらの個性をまとめるのは一苦労だ。

「まあ、話を聞け。俺たちは知らないことがまだ多過ぎる。そして、現状いくつかわかったことを話す。これからどう動くかは、俺の意見を聞いてからでも遅くあるまい」

そうして三人は割り当てられた宿の客室にまずは集まる。周囲に人気がないことを確認したあと、相談を開始した。



一方——ホテルと名のついた小屋——『ピトスの宿』から離れた場所の雪穴で、セルティたち三種族は焚き火を囲んでいた。

「それにしても、エラいことになっちまったねえ。信用できるのかい？ あの連中は」  
麦酒の注がれたコップを傾けながら、土精種の代表ロゼッタが愚痴をこぼす。

この貧乏な集落において酒樽はなかなか貴重だが、今日は特別な日に違いなかった。

「どうでしょうか？ ただ、彼らの言葉には説得力があると思いますけど——」

「どーせ、わたしはリーダーに向かないヘタレ精霊ですよー！」

微かに酔っぱらったセルティが、レストに対し、頬を膨らませてぼやく。

それを鳥獣種の代表ピリカが頭を撫でて慰めていた。

「だいじよぶだよー。結束して百年経ってギルドを設立する資金もないですけど、セルティは立派なリーダーだからね」

「いくらわたしでも泣きますよっ!？」

とつさに涙目になったセルティを見て、レストは苦笑し、

「しかし、実際ドラゴンから出た百靈貨アウラの臨時収入は助かりました。戦闘でのお金もだいぶかったから、今月の契約金も未払いでしたし」

「【ローグライク】の連中もいい加減にしてほしいよねえ。護衛の契約をしてるくせに、肝心なときばかり役立たずなんだからさー」

オレンジを丸ごと口に入れながら、ピリカが不満げに口を尖とがらせる。

それを土精種ドラフの姉御ロゼッタが慌たじなてて窘めた。

「めったなことを言うんじゃないよピリカ。連中の耳がどこに潜んでいるかわからない。理不尽だけど、彼らの力なくしては、あたいらはここじゃ生きられないのさ」

「うう、ずびばぜん。わたしがこんなところ追いやられたばっかりに……」

えぐえぐと泣きながら、酔ったセルティは身体をくねらせる。

オーバードガイア、『最下層ネザーホライズンの辺境』。

この僻地に追いやられた原因として、ギルドの設立に失敗したことがあったのだ。

流通の盛んな港町『アクアリウム』や、中央の城下町『ロウフォートレス』とまではいかなくとも、比較的モンスターが少ない農耕都市『プランター』の近くの土地で、一応のギルド設立はできるだけの資金はあったのだ。

が、その直前に起きた事件により拠点を失い、セルティたちはここへ移り住んだ。

それから百年。日々の暮らしにも不自由する生活が続いており、ギルド設立の目処は立っていない。

「あなたが気に病むことじゃないよ。それより、あの連中のことについてだけ——」  
ロゼッタの言葉に、ピリカが頷く。

「だよねえ……。今までここに来た『はぐれ人』たちと、全然違う感じだしね」  
その実力もさることながら、精神や流儀もあまりに独特だ。

オーバードガイアの世界観や霊貨アウラのシステムを異常なほど素早く理解し、かつ現世への未練も全く見せていない。

普通ならばこの特異過ぎる状況に悲嘆し、混乱し、絶望し、セルティの庇護を無視して自滅する『はぐれ人』がほとんどなのに——だ。

そういう意味では安心できたが、逆に動向が読めないともいえる。

「でも、どうするつもりですかセルティさんは？」

「はい……?」

酔っぱらって項垂うなだれていたセルティは、ふいに放たれたレストの問いに顔を上げる。

「いえ、ドラゴン討伐で得た百霊貨アウラですが、スキル消費と種族の治療代で、既に半分近くほど消費してしまいましたし、彼らに契約料として支払う分が足りませんが」

「——ああっ!」

ようやく気づいたのか、セルティの身体がピキッと固まる。集落のリーダーも楽ではない。

モンスターとの戦闘は日常茶飯事だが、大規模な戦闘は資金をバカ食いするのだ。

「ちなみに帳簿は持ってますけど、他から補填ほてんする余裕はないですよ。【ローグライク】にも、護衛の契約金を支払わなくちゃいけないですし」

「……あうあう」

レストの冷静な指摘に、更にへこむ。

哀れを誘う涙目で、周囲の三種族の代表たちを見回した。

「わ、悪いけど、うちも今月カツカツなんさね。三霊貨アウラくらいなら貸せるよ！」

「私のところはムーリー！ むしろちよつと分けて欲しいくらいだつてば！」

「レストおおおー！ 助けてくださいーい！」

ロゼッタとピリカににべもなく断られ、一番つき合いの長い半森精種ハーフエルフの代表に泣きつくが、無い袖は振れぬ、と言わんばかりにレストは首を左右に振った。

「ふん、いいですよ！ こう見えてもわたしは精霊なんですからね！ これくらいひとりで解決してみせますよ！」

酔っぱらっているセルティは、ついに開き直って胸を張る。

リボンで飾られたウェイトレス風の衣装の下で、巨大な双乳がぶるんと揺れた。



「何か秘策でもあるんですか？」

「あります！ わたしは以前ここへ来た『はぐれ人』から、彼らの流儀を教わったんです！  
自信たっぷりセルティは断言する。

それで——この場の三種族会議は、お開きになった。

「S級御曹司たちがゆく、異世界契約支配者生活」ルーラーズ・ライフ 試読版第三弾はここまで！！  
続きは、本編でお楽しみください。